

## 人生は出会い 縁を大切に

圓山 壽和(第17回卒)

### 1. はじめに

この9月に75歳になりました。もう古希になったのかの思いに浸ったのが、ついこの間だったの感がします。

5年程前(2016年)に前立腺腫瘍の放射線治療を受け、前段のホルモン投与、土日を除く毎日36回に亘る連続照射、後段の予後観察で一年近く、動き回りたい性分を我慢し抑制的に過ごしました。

それを契機に来た道を振り返り、静かに足元を見つめ直したらとの声が聞こえてきました。回想の中で人生の節目で出会った「我が師」とも呼ぶべき人が表れてきました。私の人格を認め、凜として接してくれた方々です。

それに併せ自分史への思いも湧いてきて、脳裏に去来するものをパソコンに向かいメモ書きし始めました。時には興に乗ると、次から次と色々な断片が脈絡もなく紡ぎ出され、それらが徐々に溜まっていきました。

今回、私の属する「NPO 人間環境活性化研究会」の会報の随想シリーズ「次世代のために」への寄稿を依頼されました。このこともあり何かを記すべく思いを巡らす中で、先ほど述べたメモ書きを材料に出来ないかと着眼し、結果として「次世代のために」に結びつく言葉として「人生は出会い 縁を大切に」を標題にして一文を纏めてみました。私が川越市役所に入った際に出会った「我が師」とも呼ぶべき、二人の方との出会いを記したものです。

上記のNPO 人間環境活性化研究会も川越高校・川越初雁会同様、会員間の交流の活性化を旨としている集まりであることもあり、ここでは川越初雁会のホームページの賑やかしの一環としてこちらにも同文を投稿させてもらいました。

### 2. 我が師／印象に残る言葉

#### (1) 真善美の古武士だった加藤瀧二市長

「君には渡さない」、「それでいい、頼むよ」

昭和47年(1972年)4月、東京大学文学部在学中、大学闘争に関与し2年遅れて卒業し準地元の川越市役所に就職した。教養と出会い、自由過ぎた大学生活からの脱出だった。

新採用の辞令交付式で、人事課長の順次呼上げで加藤瀧二・市長の前に進んだ時、いきなり市長から「君には渡さない」と告げられた。「何なのか」と戸惑い、幹部職員列席の式場が静まり返った中、司会の人事課長に目を向けた。頭を下げるの仕草をされ、もう一度丁寧に頭を下げた。今度は市長が演台を回り歩み寄って来て、握手をしようと言われ、「それでいい、頼むよ」と硬く手を握られたことを思い出す。

母が就職を祝い、上野の松坂屋で誂えてくれた紺のスーツを着ていた。髪はぼさぼさだったので、すぐ床屋に行った。それが私の市役所生活のスタートだった。

加藤市長の風貌は古武士然としていた。「真善美」を口にし、新年の職員訓示では1時間以上話し、「君たちは小市長である。その気概を持って事にあたりたまえ。」と述べていた。70代半ばから後半に達していたが、超然とした自負心で市役所を預かっている印象を与えた。

加藤市長は明治31年/1898年、福井県の現大野市に生まれ、旧制大野中学校を経て、福井師範本科第2部(2年制)を卒後、5年間郷里で教師をした。

後に上京し東京市立の実業学校や北海道の小樽市立女学校等でも教鞭を執る傍ら、大正15年3月、日本大学法文学部を卒業、同時に高等文官試験に合格、昭和2年官界(内務省)に入り、終戦時は富山県内務部長であった。昭和18年、農商務省書記官になった時、居を川越に定めた。

戦後/昭和22年、富山県知事選に出馬したが僅差で敗れ、官界を去った。荒川の堤外の指扇地区の水田を自作し、また数社の社長等を兼ねた。昭和26年4月の川越市長選に立候補し、川越出身の伊藤泰吉氏に敗北した後も、伊藤市長の対抗馬として市長選に挑み続けた。昭和40年9月、それまで4回戦い敗れた、伊藤泰吉市長が任期中に死去した後の市長選で、激戦を勝ち抜き67歳で市長になり、その後4期務めた。

この敗戦の間、加藤さんを支えたのが川合喜一氏で市議員をしていた同氏は、その後、助役を経て加藤市長の後継市長となった。

### ▽漢文の素養が深かった、「奔馬の奔はほとぼしっていることだ」

市長と二人になることもあった。「子どもは一人いたが4歳で亡くした」、「福井県の大野の出で苦学して日大に通い、高等文官試験に受かり内務省に入り、政府の要の企画院にもいた」と話し、シャツを捲り上げ血色の良いことを誇った。話好きで立場を問わず耳を傾けた。苦学力行の信念の人を感じさせた。

書類を届けに市長宅に伺った際、玄関にふくよかな女性が出て来られ奥様だとわかった。少し離れた所へ引っ越したお宅へも伺ったこともある。その時は居間へ通され、お茶を頂いた。奥様はできていると聞いていたが、その上品な落ち着いた立ち居振る舞いが加藤市長を裏で支えているのだなと印象に残った。(＊奥様は鳩山薫学長の共立女子大学の教授であったことを最近になって知った。)

企画課広報係のとき、職員向けの市長インタビューをしたこともあった。記憶にあるのは「奔馬のごとく」という言葉である。市長自身が「奔馬のごとく生きてきた」と言ったのか、君は「奔馬のごとく生きろ」と言ったのか忘れたが、「市長、ほんまってどういう字ですか」と聞いたところ、「君、奔(ほん)はほとぼしっていることだ、勢いよく自由奔放に動き回っている馬のことだ」と言って機嫌よく丁寧に教えてくれた。

若き日に教鞭を執っておられ、明治生まれの素養である漢文に通じていた。小学校1年の時に亡くした私の父は明治33年生まれであったが、加藤市長は明治31年生まれであったことに縁を感じる。

### ▽人口急増期の川越市行政を安定的に推進した

加藤市政時代の昭和40年代半ばから50年代半ばの頃、川越市の財政は超健全で公債費比率(歳出における借金返済率)は平均して3%前後で、昭和50年前後かと記憶するが、全国の市の

中でトップの低さであった新聞記事を目にしたことがある。

昭和30年の隣接9か村との合併で川越市の人口は2倍の10万人に、面積は6.5倍の110平方キロメートルになった。合併による財政需要の増大、人件費増もあり、合併後の昭和30年代初頭には赤字再建団体に陥り、政府の支援を受け財政再建に取り組まざるを得ない状況に置かれていたこともあった。

加藤市長の就任した昭和40年代は、人口増が年間平均1万人の急増期(年間増加率6%台)で、昭和40年代半ばから昭和50年代前半にかけては地価高騰やオイルショックという経済的激動の時代であった。

毎年複数にもなる小・中学校の新增設、本庁舎の全面建替え(昭和47年)、消防庁舎の新設(昭和49年)、市営火葬場の全面改修(昭和51年)、ごみの全焼却を可能にした西清掃センターの建設(昭和53年)など義務的行政サービスの提供や都市インフラの整備を対市民、対議会との関係で安定的に進めた行政は評価に値する。

加藤市政は長期的視点を重視し、健全で柔軟であった。市街地整備地域と農用地保全地域のバランス(3:7)を堅持し、ごみ収集などの業務面での民間委託の推進や開発公社による公共施設用地の先行取得など、優れた行政手法を発揮した。

川越駅西口の川越少年刑務所の大東地区への移転(昭和44年)は、将来の川越駅周辺の区画整理・都市再開発事業の種地を生み出し、賑わいの去った旧市街地／一番街で保存運動(昭和48年)の起きた蔵造り建造物／旧万文の市による取得(昭和52年)は、蔵造りの街並み景観整備への布石となり、埼玉医科大学附属病院の市内鴨田地区への進出に伴う用地取得等での支援(昭和47年から)は、次の川合市長の下で埼玉医科大学総合医療センターの開設として昭和60年に結実した。

(注：加藤市長が就任した昭和40年の人口は127,331人、退任した昭和56年は260,313人)

### ▽それまで出会ったことのない大きな人物であった

加藤市長が行政手腕を発揮した裏付けには、戦前戦中、内務官僚として各県の経済部長や内務部長等を経て来た経歴、経験があった。

一国一家を任されている古武士の矜持を感じた。「真善美」を説き、「君たちは小市長なのだ」と諭すように話す声には、こちらの背筋をピンとさせる響きがあった。地方自治／地方行政の何たるかを熟知し、超然と小市長たる部下を率いていた。

4期目の最後(昭和55年晩秋)にも、企画課事務管理係長として上司とともに組織改正条例の説明で市長室に出向き、加藤市長と直接言葉を交わす機会があった。

加藤市長は糖尿病から視力も落ちていた。市議会への提案説明文を読み上げると、加藤市長は大きな字に清書した説明文に目を落とし、途中で「これで良い」というふうに顔を上げこちらを向き領き、その場は終わった。シャツを捲り上げ、健康を誇示した加藤市長の姿はそこにはなく、身体が大儀であった。

川越市の現状に対し、持てる資源／資産に着眼し、将来へ向けて軌道を間違わないよう、地方政府としての行政権限を使った市長であった。傑物であった。今になってそう感じる。私にとってはそれまで出会ったことのない大きな人物であった。

私の長女が通った、市内の浄土真宗真行寺のルンビニ幼稚園の武田園長とも同郷で親しかったとのこと。4歳で亡くなったお子さんのことを話した時の加藤市長の顔が思い出されてくる。涙が出てきた。合掌。

## (2) 市職員のあり方を教えてくれた石川さん

「少し長かったが色々わかっただろう、圓山君には企画課が合っている」

川越市役所での最初の配属先は社会福祉事務所であった。石川計一さんは所長(課長職、当時44歳)で、心温かい人であった。当時、市役所は新庁舎の建設中でプレハブの仮庁舎であったが、なにかと声を掛けてくれ、市役所職員としてのあり方をふくよかな風貌で教えてくれた。

私に命じられた仕事は、低所得者への助産費用の助成を定めた新規条例「入院助産費助成条例」の施行細目を詰める事務であった。この仕事は、石川所長が昭和47年度の新規事業として発案し、市議会の議決を経た市独自の施策であった。

手続き策定のためには、基礎的知識である生活保護法以外にも、戸籍簿や住民登録台帳、種々の課税台帳、国民健康保険や国民年金の加入状況の閲覧方法を知る必要があった。庁内各課に出向き、各担当係長に教えてもらい事務手順を固めていった。

入ったばかりの職員に新規条例の施行細則の具体化など、よく任せたものだと感心する。各課の係長に実践的職場研修を受けたばかりでなく、各所に温かく教えてくれる人との繋がりができた。どの係長も私が川越高校出身で東大出であることに興味をもって、色んな話に及ぶことが多かった。石川所長は私を庁内デビューさせてくれたのだった。

5か月後には生活保護のケースワーカーを命じられた。生活保護の申請受付と家庭訪問、民生委員や医療機関、入所施設などの訪問で市内を動き回る日々になった。多彩な人に会い、地域の実情を教えてもらった。現場の事例を通し新聞の社会面の裏側を知らされ、市内の地理も徐々にわかっていった。

石川所長は昭和2年生まれの内市の農家出身で、旧制の実業学校を卒業していた。家族的な長であった石川さんは職員皆に気配りをし、和を大事にし、当時盛んであった一泊二日の職場旅行を盛り上げていた。私にとっては人生の先達者であった。

私自身は福祉の現場で4年間過ごした後、石川所長は「少し長かったが色々わかっただろう、圓山君には企画課が合っている」と言って企画課へ送り出してくれた。

## ▽市独自の施策展開を熱心に説いていた

石川所長のことで印象深いのは、所内で週1回開かれていた朝の会議でいつも「市民ニーズの掘り起こしと科学的データ管理が重要」と説いていたことである。

生活保護を始め老人福祉や障害者福祉など大半のことが国、県からの通達の中でなされていたが、現場を重視し、市独自での上乘せ部分はないかと提起していた。時代の風として地方の時代が吹き始めていた。

これらの背景には昭和40年代半ば頃から、大気汚染や水質悪化の公害問題が社会問題化し、市民参加を掲げる革新都政などの革新自治体が登場していたこともある。

松下圭一・法政大学教授がシビル・ミニマム(市民生活基準/生活権・政策公準)を唱え(岩波

新書「都市政策を考える」昭和46年発行)、地方政府としての自治体のあり様が論じ始められていた。

当時の福祉行政の実態は生活保護行政の付帯関連の域を脱していなかった。市役所現場で新たな知見を得ようとしても社会福祉の実践的専門書も未だ少なく、憲法の生存権を注解した社会保障論の本か福祉国家論を論じた厚生経済学の教科書の類があるくらいであった。

石川所長は新時代の風を感じ、地域福祉の推進に向け、社会福祉協議会の活性化や民生委員との連携に熱意を持っていた。福祉事務所の所管には生活保護以外にも老人福祉や心身障害者福祉もあると説き、国(厚生省)や埼玉県が旗振りをしていたこともあり、市独自の上乗せや新規の施策展開を模索していた。

寝たきり老人や一人暮らし老人など老人福祉面では、それまでの金銭保障や施設入所の領域を乗り越え、在宅福祉できめ細かな施策を実現していった。家庭奉仕員による一人暮らし老人の訪問介護や寝たきり老人への移動入浴車の導入などである。

障害者福祉でも県広域で開催の障害者スポーツ大会の後押しなど、保護者の団体も巻き込んで推進していた。福祉の現場こそ実は一番やりがいのある職場だということ、石川所長は身をもって実践していた。

### ▽自然と場を和ませる人だった

石川さんはその後、加藤市長の辞職に伴う昭和56年2月の市長選で、助役から出馬し当選した川合喜一市長の下で助役になった。気さくで誰彼となく会うと声を掛け、若手職員のみならず中年の女子職員や現業職の人たちにとっても人気があり慕われた。

研修計画体系の中に課長補佐昇格者(15名程度)を対象にした2泊3日の宿泊研修があった。外部講師からセミナー形式で組織管理手法などを学ぶのだが、2日目の夜は懇親の場で、各部課を横断した交流の場としても期待されていた。

川越から少し離れたセミナーハウスを利用していた。石川助役は身近な上司という雰囲気、その懇親交流の場にも顔を出し、皆の話しに耳を傾け楽しく時を過ごしていた。石川さんが来ると自然と場が和んだ。

川越駅東口再開発事業が進捗し、再開発ビル着工が確定した頃(昭和63年末)、川越市出資のビル管理会社である第3セクター・川越都市開発(株)が前面に出て、入居者と床配置や賃貸借条件などの詰めを始めた。その際、入居地権者全員との話合いの後、施行者の川越市、核テナントの丸広百貨店も交え懇親の席が設けられた。川越都市開発(株)の副社長でもあった石川助役がその場に顔を出し、「川越市の表玄関を一緒に作っていきたい、宜しくお願いします」との挨拶があり、雰囲気が和み盛り上がったことを覚えている。

川越都市開発(株)社長の川合市長との相性もよく、石川助役は粉骨砕身、川越駅東口再開発事業の進捗を見守り、平成2年5月、再開発ビルオープンまで漕ぎつけた。しかしその4か月後の平成2年9月、62歳で亡くなられてしまった。突然の病死であった。呆然とするしかなかった。「巨星墜つ」であった。

### ▽背中を押してくれる人だった

40代に入った頃、居住する団地の夏祭りや運動会を企画していたこともあり、私に小学校PTA会長への就任依頼の話が来た。

市職員として教育委員会との関係でどうなのかと、助役の石川さんと雑談の際、そのことを話題にした。「やった方がいい、職員は先ず住民と触れ合う場が大切だ」と言って、色んなことをすることを勧めた。

地域のPTA会長を引き受けたときは、川越駅東口再開発事業に従事しており心身共に追っかけられていたが、有給休暇を適宜取らせてもらい楽しく過ごさせてもらった。

その2年間はチャリティバザーを仕掛け、会費値上げの説明会など忙しかった。本部役員は20人程で私と書記の一人以外は全部女性であった。隣接の小・中学校長を始め他のPTA会長や学区内の自治会長など多様な方と知り合い、私には息抜きの間でもあった。石川助役はそんなところまで見通していた。

第3セクターに出向していた時、行きつけの小料理屋に寄った際、カウンターに石川助役も偶然ひとりおり、気の置けない女将さんも交え、気の休まる時間を持たせてもらった。「たまに来るんだな、聞いてた、元気か」の声が今も耳に残っている。

後輩としての私を励まし背中を押してくれた人であった。風貌も含め、その包容力には感心せざるを得なかった。私にはないものを多く持っていた人であった。

大学闘争の疲れや余波もあり、最後は脱出願望に襲われた大学生活を終え、それなりの想いを抱き就職した職場で、このような上司に出会えたことは幸運であった。

先日、新型コロナウイルスで出歩くことを控えていたこともあり、また懐旧の思いが湧いてきたこともあり、石川さんの墓地を知人から聞き出し、初めて墓参りさせてもらった。石川さんが逝去してから30年経っていた。

### 3. おわりに

今回のテーマ「次世代のために」の次世代とは、どの年代を対象にしているのだろうかと思いました。次世代と言っても、人生ここまできると次には何世代も重なり待ち構えています。自分をそこに置き、今の自分にとって印象深かった世代を思い浮かべてみました。

結果としてここでは、これから社会に出ていく若い世代とともに、それを迎え入れる組織(官公庁や企業)の幹部層(40代後半~50代後半)を対象に記したようになりました。

私事ですが、大学を卒業し社会に出たとき、幸運にもいい出会いをし、その縁で頂いた言葉で励ましてもらったことに感謝しています。今も時に加藤龍二・市長の「君には渡さない」、「それでいい、頼むよ」、そして石川計一・福祉事務所長の「少し長かったが色々わかっただろう、圓山君には企画課が合っている」の声が聞こえてきます。

果たして私自身、ここに至るまで誰かに対して今回記させてもらった「我が師」のごとく存在し得たことがあったのか、内心忸怩たる思いを抱きつつ雑文を閉めます。お読み頂きありがとうございます。

平成3年9月18日記